

Title	費禪登仙考：黄鶴楼と万里橋の逸話をめぐって
Sub Title	On the immortal Fei Yi : folklore of "Huanghelou" and "Wanliqiao"
Author	吉永, 壮介(Yoshinaga, Sosuke)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.39 (2007. ) ,p.212(17)- 228(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20071220-0212">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20071220-0212</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

費禕登仙考——黄鶴樓と万里橋の逸話をめぐって——

吉永壮介

一 前言

南北朝時代以来、有数の名勝として文墨の士の関心を集めてきた黄鶴樓は、唐・李吉甫『元和郡県図志』卷二七「江南道三」に、

呉の黄武二年（二三三）江夏に城きやうき、以て屯戍とんじゆの地を安んず。城の西は大江に臨み、西南の角は磯に因りて樓を爲つくり、黄鶴樓と名づく。<sup>①</sup>

と見えるように、その一帯は三国時代に呉によって拓かれたものである。付近には後漢末の禰衡が「鸚鵡賦」を詠んだとされる鸚鵡洲があり、多くの詩人がその狂顛というに近い不服従の思想に想いを致した<sup>②</sup>。また長江を少しく溯れば赤壁の古戦場へと通じており、歴史懐古の詩題を数多く提供する土壌として申し分無い条件を備えていたといえるだろう。そして唐代以後、数多くの詠史詩が詠まれる一方で、崔顥「黄鶴樓」を嚆矢とする仙人にまつわる詩も数多く詠まれるようになった。

黄鶴樓の仙人に関する最も古い伝承は、『南齊書』卷一五「州郡下」に見える次の記述である。

夏口城は黄鶴磯に據り、世に傳う、仙人子安黄鶴に乗りて此の上を過ぎるなりと。<sup>(3)</sup>

この『南齊書』の仙人子安を皮切りに、梁・任昉『述異記』は荀瓌の逸話を記し、『報恩録』は辛子の酒屋の逸話、唐・閻伯理「黄鶴樓記」所引『凶経』は費禕の名を伝えている。そして時代が下ると呂洞賓信仰が大きな比重を占めるようになり、様々な系統の仙人の逸話が錯綜して黄鶴樓の縁起に仮託された様相は、まことに仙人のローカルな小図鑑たる観がある。<sup>(4)</sup>

これら黄鶴樓縁起の伝承が語り継がれてきた様相については、すでに多くの優れた研究がなされているが、ひとつとところになぜかくも多様な仙人が宿り得たのかといえ、その理由の一つは黄鶴樓の立地に求められるだろう。黄鶴樓が位置するのは長江と漢水とが合流する地点、蜀から江南へと続く水路の中継点であり、用武の地と詠われた荊州の東部である。様々な経脈が幾重にも折り重なった軍事・交通の要衝として、人や物資の流通、そして情報が行き交う利便性を有していたことこそ、系統の異なる様々な仙人の伝説を涵養した大きな要因の一つに数えられるであろう。

本稿では錯綜した逸話のなから、本来仙人に列する人物ではないにも関わらず黄鶴樓伝説に取り込まれ、それ故に頻々として議論が絶えなかった費禕をとりあげ、実在の費禕像と比較しつつ、深く信仰されるまでにはいたらなかった仙人としての費禕受容の変遷について概観する。

## 二 費禕と黄鶴樓

(1) 『三国志』に見える史実としての費禕像

費禕と黄鶴樓との関わりをたどる前に、陳寿撰・裴松之注『三国志』卷四四「蜀書・費禕伝」によって、実在の人物としての費禕の事績を確認しておきたい。

費禕、字は文偉、江夏郡鄆県の人で、三国蜀の劉備・劉禪二代に仕えて録尚書事・大將軍にまで累進した。「識悟過人」と言われるほ

ど物事の理解がはやく、抜群の事務処理能力を誇り、諸葛亮亡き後は蔣琬とともに蜀の内政面を支えた。また国外にまで不仲であることが知られていた魏延と楊儀の仲を取り持つなど、対人関係における周旋の才もあつた。外交の舞台においては呉の諸葛恪とわたりあい、大帝孫権からも高い評価を受け、「君は天下の善良の士であるから、必ずや蜀の朝廷の股肱の臣となり、そうなればたびたび呉を訪れることはできなくなってしまうだろうな」と言わしめた。<sup>6)</sup>

費禕は内政・外交・人事のどの分野においても力量を発揮した有能な官僚であつたが、かといつて堅物というわけではない。磊落な人柄でもあり、政務の合間には来客との歓談を楽しみ、博打も好んだという。あるとき魏軍の襲来が報ぜられ、軍を率いて出陣すべく忙殺されているとき、光禄大夫の来敏が別れの挨拶に訪れ、碁を打とうと申し出た。陣中は軍令の伝達と人馬が行き交う喧騒のただなかであつたが、費禕は碁の対局に没頭する。その様子を見た来敏は、「さきほどはあなたを聊か試してみたまでです。あなたはまことに才徳のある人物ですから、必ずや賊軍を退けることができるでしょう」と言つた。かくて内外から多くの信望を得た費禕であつたが、延熙一六年（二五三）の正月、宴席で酔いつぶれたところを魏から降つてきた郭循（郭脩）に刺殺された。この暗殺劇は費禕の磊落さ故の悲劇であるが、後世の史家たちからは一国の宰相にあるまじき不用心だとの誇りを受けることになる。

費禕の諡は敬侯であるが、魏の荀彧や荀攸も敬侯と諡されていることを考えれば、蜀において費禕の負つていたものの大きさが分かるであろう。なお費禕亡き後、その職務を引き継いだ董允は、費禕のやり方を真似て振る舞おうと試みたが、十日もせぬうちに職務が滞り、「人間の才能や力量にはこれほどの隔たりがあるものなのか。とても私の及ぶところではない。一日中政務を執つていても、それでも暇な時間がない」と歎じたという。

後世の諸書が引く史実としての費禕像といえは、「識悟過人」、来敏との囲碁、そして郭循による刺殺が主たるものである。そこには仙人として崇められるような色彩は無く、黄鶴楼とも関わりは無い。強いて言えは、並外れた才能を持ちながら、酒や博打、囲碁に興じて飄々たる様が仙人の氣質に通じていると言えなくもないが、仙人に擬せられるようになった最大の要因は、やはり出身地が黄鶴楼と同じ江夏郡であり、土地の人々の誇るべき人物に数えられていたことに求められるだろう。

(2) 唐から五代まで

費禕と黄鶴楼を結びつけた最初の文献として広く知られるのは、唐・閻伯理「黄鶴楼記」である。永泰元年（七六五）、鄂州刺史の穆寧に随って黄鶴楼に遊んだ閻伯理は「黄鶴楼記」を著し、そのなかで『凶経』を引いて費禕の伝承を記した。

州城の西南の隅に黄鶴樓有り、圖經に云う、費禕登仙し、嘗て黄鶴に駕し返りて此に憩い、遂に以て樓に名づく<sup>⑦</sup>と。

この『凶経』の記述は、黄鶴楼の名を高からしめた崔顥の詩とも相俟って、費禕を仙人として広く世に知らしめた。

費禕の仙人としての登場には唐突な感がぬぐえないが、しかしこれは必ずしも閻伯理あるいは『凶経』の捏造ではなかったと思われる。黄鶴楼周辺に費禕にまつわる何らかの伝承がなされていた証として、唐末・五代梁の羅隱の詩に幾つかの糸口を見出すことができる。羅隱「游江夏口」には「黄祖不能容賤客、費禕終是負仙才<sup>⑧</sup>」の句があり、黄祖に殺された賤客、すなわち禰衡と並んで費禕の名が挙げられている。同じく羅隱「投江夏口韋尚書啓」には「文聘江山、粗資吟玩、費禕欄檻、聊奉登臨<sup>⑨</sup>」の句が見える。文聘はもと劉表に仕えたが、後に曹操に見込まれて江夏鎮守の任にあたった人物である。それと併称される「費禕欄檻」が具体的にどのような伝承を指すのかは定かでないが、高殿に登り欄檻によりかかって茫洋たる長江に臨んでいる悠揚迫らぬ態度の費禕の描写は、実際に想像可能なイメージであったのだろう。羅隱の詩は、いずれも仙人としてというより史実の人物としての費禕をイメージしたものであるが、江夏や黄鶴楼一帯にそこを郷土とする費禕像が形成されていた可能性を示しており、鸚鵡洲でその名を知られた禰衡や、当地で活躍した文聘と並んで費禕の名を挙げることに對する違和感がなかったことが分かる。はるか後代ではあるが『湖北通史』卷一三三や『江夏県志』卷六に費禕の伝が立てられているのにも、郷土の人物としての共感が込められているよう。こうしたいわば地元の人物としての費禕像が、仙人像の成立の土台になっていたことは想像に難くない。

なお羅隱は、「一箇禰衡容不得、思量黄祖謾英雄」の句を気に入られて、唐末の節度使から後に五代の呉越国王となった錢鏐に登用されて世に出ることができたという経歴を持つ<sup>⑩</sup>。また羅隱には「途中寄懷」「安陸贈徐礪」「西京道中」「湖洲裴郎中赴闕後投簡寄友生」「敘

「二狂生」のように禰衡に言及した詩文が多くあり、思い入れの深さが窺われる。そうした自分の人生に転機をもたらしてくれた禰衡と並べて費禕の名を挙げていることも見逃せないであろう。

(3) 北宋から南宋まで

北宋に至ると、費禕を仙人として扱う者と、荒唐無稽であると批判する者との双方が見られるようになる。

費禕を仙人として記述する筆頭は北宋初期の樂史『太平寰宇記』であり、その卷一二二には「昔費禕登仙、每乘黃鶴于此樓憩駕、故號爲黃鶴樓」とある。<sup>11</sup> この記述が閻伯理「黃鶴樓記」所引『凶経』を踏襲していることは明らかであり、唐から北宋に至る間に、費禕の伝承が地理書に拾われるほどの説得力を有するようになっていたことが分かる。賀鑄「黃鶴樓」詩にも「登真者誰子、昔有費公禕、白日玉書下、青天駕鶴飛、此地少留憩、神標悵依依、振裾謝塵濁、與爾方遠違<sup>12</sup>」の句が見えることから、黃鶴樓前に広がる長江の渺茫たる風景のなかに、確かに費禕がいたことが窺われる。

かくて仙人費禕が浸透するかに思えたが、北宋末の胡仔によって水を差されることになる。胡仔『苕溪漁隱叢話』後集卷一七所引『江夏辨疑』は、閻伯理「黃鶴樓記」や任昉『述異記』の記述を比較しつつ、

予蜀志を按ずるに、費禕は魏の降人郭循の害する所となれば、則ち禕固より其の終りを得ず、安くんぞ鶴に駕して此に憩うこと有らんや。<sup>13</sup>

と述べ、費禕が刺殺された史実をあげて、費禕仙人説の謬見であることを明示している。この引用に続けて胡仔は次のように述べている。

崔顥の「題黃鶴樓」詩は、亦た以て費禕昇仙の地と爲し、謬誤を承襲し、復た攷正せず。<sup>14</sup>

この胡仔による費禕否定説に続くように、南宋の張栻も『南軒集』卷一八「黄鶴樓説」において、「思うに黄鶴樓の名は、山の名から得たものであらう」として、続けて、

而るに『唐圖經』は、何に自りて怪説を爲し、費文偉仙去して、鶴に駕し來たりて此に憩うと謂うや。<sup>15</sup>

と述べている。張栻は続けて荀瓌や呂洞賓の伝承もひとまとめにして、「事を好む者どもが妄説をなすと、後代の者はその誤りであることを察することができず、さらに飾り立ててしまふのである」と一刀両断している。<sup>16</sup>

この後の南宋後期の地理書は、胡仔の説ならびに張栻の強烈な論断の影響を色濃く受けている。王象之『輿地紀勝』卷六六「鄂州上」の「景物下」は、『南齊志』の子安と『凶経』の費禕の説を並記してから、「閩伯理は費禕の伝承を信じることができると考えて「黄鶴樓記」を著したが、張栻等がその信憑性について論じている」と述べている。<sup>18</sup> また『方輿勝覽』卷二八「黄鶴樓」の項は、「黄鶴樓の名前は山名からとつたものであり、思うに南朝にはすでに名を知られていたであらう」と述べ、<sup>19</sup> 続けて『南齊志』の子安、閩伯理引く『凶経』の費禕の名を挙げ、さらに張栻「黄鶴樓説」をそのまま援用している。ほかに『黄氏日抄』卷三九や『氏族大全』卷一七も張栻の説をとり、また『詩林広記』卷三は「江夏辨疑」をとるといった具合に、胡仔と張栻を二つの大きな論拠として費禕を否定する論調が定着していった。

しかし激しい反駁を受けたこと自体が、当時費禕の伝承が知られていたことの証でもある。そして胡仔や張栻の費禕否定説の論証が定着する一方で、費禕を仙人として詠う系統も、華々しい展開こそ見せないものの脈々と受け継がれてゆく。南宋末から明清にかけて、費禕の伝承がささやかながらも居場所を占めていたことを、以下にたどってみる。

張栻とほぼ同時期を生きた南宋・陸游の『入蜀記』卷五は、「黄鶴樓は費禕がここより飛び立ち、後にまた黄鶴に乗って帰って來たので、黄鶴樓と名付けられた」と記し、崔顥や李白が詩をつくったこと、鸚鵡洲等について触れたあと、漢陽門を出たところにあつたという仙人の洞穴を見に行き、「いまの鄂州の人々は呂洞賓の洞だというが、思うに俗説で附会されたものであらう」と述べている。<sup>20</sup>

また白玉蟾の名で知られる南宋中期の道士・葛長庚「武昌懷古十詠」の「黃鶴樓」にも「大醉倚樓呼費禪、蓬萊山下幾斜暉」と見え、道士が呼びかける存在として費禪がありえたことが分かる。<sup>(21)</sup>

#### (4) 明代以降

明代に呂洞賓を祀る傾向が強まった様子は、多くの記録から窺い知ることができる。<sup>(22)</sup> 明・郭正域「仙棗亭記」は「黃鶴の故事について、ある者は王子安であるといい、またある者は費禪であるというが、近頃はみな呂洞賓に帰している」と端的に伝えている。<sup>(23)</sup> 『名義考』巻四も費禪否定説に与しており、宋代に比べて仙人費禪の存在感が薄れたであろうことは確かだが、しかし郭正域「仙棗亭記」は続けて「鶴山のふもとには費禪洞があり、鶴に跨ってやって来たのが費禪であることは疑いない」とも述べ、さらに引き続き呂洞賓説が誤りであることの立証に努めている。それは必ずしも呂洞賓一色というわけではなく、時代によって信仰の対象が変遷したとらえる一派もいたことを示しており、そのなかで費禪もしかるべき位置を占めていたとみることもできよう。沈鍾も「重修黃鶴樓記」において、「漢の神仙・費文禪が鶴に乗って去り再び戻って来なかったことは、唐の詩人崔顥の詩に具に見えることであり、たしかにに認ではないであろう<sup>(24)</sup>」と述べており、信仰が費禪から呂洞賓へと移ろったという認識がある程度共有されていた可能性を示している。

明代に呂洞賓信仰が広まったなかで費禪に触れている詩文を見ると、概して諸説を網羅的に併記するものが多く、どれか一つの意見に与して仙人を特定しようという情熱はむしろ薄れているように見受けられる。地理書である『大明一統志』巻五九「黃鶴樓」の項が、子安、費禪、荀環、張杖の説、さらに崔顥の詩を列挙して記しているのも一つであるとしても、例えば張維枢「黃鶴樓游記」が「費耶、呂耶、棗耶、鶴耶、亭耶、樓耶、仙耶、人耶、崔之白雲耶、太白之鳳凰臺耶<sup>(25)</sup>」と、黃鶴樓にまつわる伝承や建築物を列挙し、まとめて一つの大きな感慨として表白していることに目を引かれる。何宗理「登黃鶴樓」には「暮敲殘月千山冷、笛落孤亭萬里秋、大醉倚闌呼費禪、兼葭萍蓼漫成憂<sup>(26)</sup>」と見える。「棋敲」以下の二句で呂洞賓を詠いながら、「大醉」以下の二句で重ねて費禪も偲んでいる。欄檻に倚るのは樓閣を詠む際の常套句ではあるが、「大醉倚闌呼費禪」の句は、さきに見た葛長庚の「大醉倚樓呼費禪」の句を踏まえているであろう。

英燦「黃鶴樓歌」には「景物爭奇双眼明、荀公費公何處尋<sup>(27)</sup>」の句があり、任家相「黃鶴樓賦」には「緬文偉之蛻化、偉荀環之仙寮<sup>(28)</sup>」と



見え、ともに失われた仙人として費禕と荀環とに想いを馳せている。

一風変わっているのは費宏の「登黃鶴樓步韻」である。費宏はその冒頭で、同姓であることから費禕を「吾宗」と称し、羽化登仙の故事から描き始め、襴衡や崔顥へと筆を進めている。<sup>29</sup>

また王世貞『列仙全伝』巻九にも費禕は取り上げられている。費禕の字が子安とされていたり、辛子の酒屋の伝説を取り込んでいたりするなど、その混淆ぶりがいかにも眉唾ではあるが、<sup>30</sup>様々な伝承に対してある程度大らかに向い合う明代の黄鶴樓に対する気風と、ある意味合致していると言えるかもしれない。

明代は黄鶴樓に関する膨大な詩が詠まれた時代であり、そのなかで費禕が占める割合は決して大きなものではないが、呂洞賓信仰の陰になりながらも費禕否定説に抹殺されることなく、ささやかに復権の機会を窺うが如き様相を垣間見ることができる。明から清にかけて、費禕洞なるスポットが浮上するのもその一例であろう。『大明一統志』巻五九には、「費禕洞は黄鶴山の背後にあり、昔の『凶経』は費文禕が昇仙した場所であるとする。李宗孟の詩に「空遺費仙跡、不見庾公遊、草木有新色、江山餘故愁」とみえる<sup>31</sup>」とあり、清の『湖広通志』巻七もこの記述を踏襲している。『江夏県志』巻二は「費禕洞は黄鶴山の南にあり、世に費禕が仙人になるべく修行を積んだ場所であると伝えられている。荀環の字が叔禕であるために、文偉（費禕の字）と誤ったのである<sup>32</sup>」と記し、顧祖禹『讀史方輿紀要』巻七六「黄鶴山」の項は、「蛇山の北に費禕洞がある」と記した後に、「任昉曰く、荀環昇仙の地であって費禕ではない<sup>33</sup>」と記しているが、地理書が拾わざるを得ない程度まで費禕洞の存在は知られていたのである。

清代には、費禕に関する新たな伝承が生まれたり、あるいは新たな論拠を得て激しく論駁されたという大きな形跡は見られず、多くの伝承のうちの一つとして淡々と記されている観がある。『淵鑑類函』巻三四七は閻伯理が記した『凶経』系の費禕の伝承のみを載せており、『大清一統志』巻三三五、『佩文韻府』巻九九上、『歴代詩話』巻四八、王琦『李太白詩集注』巻七、八、趙殿成『王右丞集』巻三等は、いずれも諸説を網羅的に記している。

そうしたなかで特筆に値するのは、乾隆帝が費禕を詠う詩を残していることである。「南苑行宮題仇英黃鶴樓図用崔顥韻兼效其体」には「兩箇地仙誰跨鶴、千秋佳話空傳樓」と見え、注には二人の地仙とは子安と費禕である旨が記されている。<sup>34</sup>複数の仙人を意識しながら

も、誰か定かではない茫漠たる仙人像としてそのまま受け入れて詠う、という黄鶴楼の抒情は、明代以来目立って現れたが、その曖昧さは清朝考証学の隆盛の間隙を縫うようにして、ついに皇帝の膝下にまで到達したのである。乾隆帝は「海天羣鶴歌題余省画」でも費禕に触れており、そうした費禕容認の意向を背景としてであろう、乾隆帝三十二年には湖北按察使・朱珪が黄鶴楼仙棗亭にて「費公祠記碑」を撰したことが『江夏県志』巻八に見える。<sup>(35)</sup>

なお黄鶴楼に掛けられている楹聯のなかにも費禕を取り上げているものがある。清・黄肇敏の十六言対には「占尽好江山、休徒誇崔顥一詩、費禕一笛」とみえる。<sup>(36)</sup> また清・王鎮藩の四十八言対には「溯千年以往、只数笛弄費禕、酒賁呂祖、詩題崔顥、筆擱青蓮」とみえる。<sup>(37)</sup> 元来、黄鶴楼で笛といえば呂洞賓のイメージであるが、いずれも費禕と笛を結びつけ、呂洞賓と絡ませているのが興味深い。また清・呉鳳桂の十七言対にも「費禕本仙人賁酒」と見え、<sup>(38)</sup> この酒が王鎮藩の楹聯同様に呂洞賓との絡みであるのか、それとも王世貞『列仙全伝』に見える辛子の酒屋と費禕の伝承の混淆なのか判然としないが、それは書いた当人たちにとっても、すでに目くじらを立てて論じるような問題ではなくなっていたのかも知れない。

なお黄鶴楼の現在の費禕亭は、一九九三年に建てられたものである。<sup>(39)</sup>

### 三 黄鶴楼と三国志の物語

前章では黄鶴楼における費禕受容の変遷をたどったが、黄鶴楼と三国志の物語との関わりについても確認しておく必要がある。

黄鶴楼の創建は、三国時代が本格的に幕開けした直後の黄武二年（二三）であること、すでに『元和郡県図志』で見た通りであるが、陳寿『三国志』には黄鶴楼に関する言及は見られない。

しかし民間では、黄鶴楼が三国志の物語の舞台の一つとして語られていたことを、『三国志平話』巻中の「玄德黄鶴楼私道」のくだりや元雜劇「劉玄德醉走黄鶴楼」が現在に伝えてくれている。『三国志平話』と雜劇における「黄鶴楼」はともに、赤壁の戦いの後、周瑜が策略をめぐらして宴席で劉備を亡きものにせんとするが、失敗して逃げられてしまう話である。登場人物や、構成と描写の粗密は異なる

るが、どちらも劉備が危地を脱する遁走劇である点は変わらない。

もつとも、「黄鶴楼」を舞台にした三国志の物語は、そのままの形で小説『三国演義』に取り込まれなかった。その点については、高橋繁樹氏が指摘するように、劉備が孫権の妹を娶る、いわゆる「甘露寺」のくだりでの遁走劇との内容的な重複を避けるため、「黄鶴楼」の話の方を削ったのであろう。<sup>(40)</sup>

ところで、正史には見られない「黄鶴楼」を舞台に三国志の物語が展開するのは、黄鶴楼の高名なるがゆえの荒唐無稽であると思われるが、詩文の世界に鑑みるとあながちそうとも言い切れない向きがある。後漢末の彌衡由来の鸚鵡洲が黄鶴楼と対になって詠われることが多いのもとりわけ赤壁の戦いと重ねて詠われることが多いことを見逃してはならない。ざっと見渡すだけでも、黄鶴楼を題に取りながら赤壁の戦いや三国時代の興亡をあわせ詠んだ詩文は、宋の張愈「楚中作」、高似孫「答武昌吳広文」、元の陳孚「黄鶴楼歌」、明の何喬新「寄懷黄鶴楼」、李夢陽「登黄鶴楼」、顧璘「題黄鶴楼」、清の彭而述「再登黄鶴楼」、顧景星「黄鶴楼吊古」、周起渭「黄鶴楼放歌」等々、枚挙に暇がない。黄鶴楼と赤壁、あるいは三国時代の興亡との地理的・心理的な親近感が、黄鶴楼を舞台にした三国志の物語を涵養する土壌を形成していた。彼らにしてみれば、黄鶴楼が実際の三国時代の歴史と直接関わっていないことを知ったうえであつても、黄鶴楼と赤壁の戦いを同じ地理的な枠組みのなかで詠うことに違和感を覚えなかった、という点が重要である。

『三国志平話』や雑劇における「黄鶴楼」の成立と、詩文における黄鶴楼と三国志の親近感の浸透は、三国志にまつわる史跡を黄鶴楼に築かしむる根拠を与えたであろう。また『三国志演義』は「黄鶴楼」の物語そのものは採用しなかったが、三国志に登場する人物たちへの意識を強めさせたはずである。さればこそ、黄鶴楼の湧月臺は明代に建てられたとおぼしきものであるにも関わらず、その傍らの石に刻まれた「湧月」の二字が曹操の遺筆であるという伝承が生まれ得たのであり、また費禕を祀る洞も現れたのである。明代に黄鶴楼にて費禕に触れる詩文がそれなりに見られるようになった背景の一つには、三国志の物語の普及が直接的あるいは間接的に及ぼした影響があろう。

#### 四 費禕と万里橋

黄鶴楼を除けば、費禕にまつわる史跡ではほとんど唯一ともいえるのが、四川省成都市の南部、錦江にかかる万里橋である。

万里橋は付近に杜甫草堂があることや、唐の玄宗がはるばる到ったことでも有名である。もとは長星橋や篤泉橋と呼ばれたが、それが万里橋と呼ばれるようになった由来について、諸葛亮をめぐる二つの同工異曲の話が伝わっている。一説には、かつて費禕が諸葛亮に命ぜられて呉に使者として赴く際、送別の宴席で「万里の行はこの橋から始まるのです」と述べたことによるといい、また一説には、呉からの使者・張温が帰国するのを諸葛亮が見送り、「この川を下って揚州にいたること万里」と述べたことによるといい。いずれにせよ蜀から呉への長い旅程を前にした感慨として伝えられたものである。

万里橋の名は、東晋・常璩『華陽国志』卷三「蜀志」に「大城南門曰江橋、南渡流江曰萬里橋」と見えるのが始まりである。<sup>(42)</sup>

次いで唐『元和郡県図志』卷三二に、

萬里橋は大江水に架かり、縣の南八里に在り。蜀使費禕おもむ呉に聘おもむくに、諸葛亮之を祖おぐり、禕嘆じて曰く、萬里の路は此の橋より始まると。因りて以て名と爲す。<sup>(43)</sup>

と見えるのが、費禕が使者として呉に赴くのを諸葛亮が送別するという話の初めての記述である。但し同じく唐代の陸贄「万里橋賦」には費禕の名は見えず、徐堅等『初学記』卷七や杜佑『通典』卷一七六、李肇『唐国史補』卷上にも万里橋の名は見えるものの諸葛亮と費禕の逸話は引かれていないところを見ると、誰もが知るまでに普及したというわけではないようである。

費禕と万里橋のつながりは、北宋『太平寰宇記』卷七二が記したことにより、広く知られるようになった。諸葛亮が費禕を見送る点は『元和郡県図志』と同様だが、細部に若干の異同がある。

萬里橋は州の南二里に在り。亦た篤泉橋と名づくるは、橋の南に篤泉有ればなり。漢使費禕呉に聘おもむくに、諸葛亮之を祖おとり、禕嘆じて曰く、萬里の路は此の橋より始まると。故に萬里橋と曰いう。<sup>(44)</sup>

後代、万里橋の縁起を語るとき典拠として『華陽国志』『元和郡県図志』『太平寰宇記』の三書が多く引用され、北宋『太平御覧』巻七三、南宋・范成大「呉船録」巻上、『錦繡万花谷』前集巻六、同續集巻一一、周弼『三体唐詩』巻二、王十朋『東坡詩集注』巻一五等に見え、南宋には万里橋は費禕の史跡として定着したとおぼしい。

その一方で、南宋・劉光祖「万里橋記」には次のように見える。

七星橋の一は長星橋と曰いい、古今相傳うるに孔明此に於て呉使張温を送りて曰く、此の水下りて揚州に至ること萬里なりと。後因りて以て名づく。或るひと則ち曰く、費禕呉に聘おもむくに、孔明之を送りて此に至りて曰く、萬里の道は此より始まるなりと。<sup>(45)</sup>

張温は費禕と同じく、一時期外交のプロパーとして呉と蜀を往還して国交に努めていた人物なので、諸葛亮が見送ったことの信憑性はあるといえる。しかしすでに見たように、南宋期には万里橋の名が費禕によって定着しつつあったことを考えれば、張温の逸話は万里橋が史跡として定着したことから新たに派生した可能性が高いであろう。南宋『方輿勝覽』巻五一や南宋・李劉撰、明・孫雲翼箋釈『四六標準』巻三九は費禕と張温双方の逸話を記しており、どちらの話も広まっていた様子が窺えるが、南宋・施元之・施宿『施注蘇詩』巻二四はそうした状況を「費禕と張温の二つの説は殊ことなつてはいるが、つまるところ孔明によってその名を得たということである」と小気味好く喝破している。<sup>(47)</sup>

費禕と張温の二説については、双方をとりあげているものも見えるが、知名度としては概して費禕の方が勝っている。費禕説のみを紹介するものは南宋・范成大「呉船録」をはじめ、『資治通鑑』巻二七一の元・胡三省注、楊齊賢集注・蕭士贇補注『分類補注李太白集』巻八、明に入ると『四六標準』巻八、一二、二五、名勝古跡に通じていた曹学佺の『蜀中廣記』巻一、彭大翼『山堂肆考』巻二七、陳耀

文『天中記』卷一六、『大明一統志』卷六七、楊時偉「諸葛忠武書」卷九、辺貢「賦得万里橋送客」、陶宗儀「題江山万里图」等々、史書・類書に数多く引かれている。清代にも『御批通鑑綱目』卷五五、『御定通鑑綱目三編』卷四〇、『御選唐詩』卷二八、『佩文韻府』卷一七、二三上、『四川通志』卷二二下、四五、『水経注集釈訂訛』卷三三、『歴代詩話』卷三七、『御定分類字錦』卷六、四五、仇兆鰲『杜詩詳注』卷九、『御選唐詩』卷二〇、『淵鑑類函』卷三〇〇、三五二等の諸書が万里橋を費禕由来のものとして記している。<sup>48)</sup>

但し、これらのほとんどは単なる史跡の説明であるにとどまり、詩題としての成熟を見せているとは言いがたい。かろうじて明の辺貢や陶宗儀の作品でいくばくかの抒情と絡めて扱われているのみである。この点では、黄鶴楼にまつわる費禕の詩が明代に数多く詠まれないながらも、大きなふくらみを持ち得なかったのと共通しているといえるかもしれない。

## 五 結語

正史『三国志』では有能な官僚であった費禕は、閻伯理の筆下、突如仙人としての扱いを受けた。酒、囲碁、博打も好むという磊落な人柄であったこともさることながら、江夏出身ということから、唐代には黄鶴楼を郷土とする誇るべき人物として懐古されており、そこで崔顥の詩の風韻に載せられて仙人として里帰りをしたかのようなのである。もともと、黄鶴に乗って往還したこと以外のエピソードを育めず、人々の信仰の対象としての深みを持ち得なかった点では、仙人としての才能には乏しかったと言わざるを得ない。

仙人費禕は唐から北宋にかけて黄鶴楼縁起の大きな一角を占めていたが、北宋末から南宋にかけて胡仔と張栻の激しい反駁を受け、さらに明代には呂洞賓信仰におされる情勢であった。しかし明代の黄鶴楼には、どの仙人かを特定することに躍起になるのではなく、全てを包括してしまう大らかさがあった。費禕も他の仙人との雑居のような形で黄鶴楼のなかに居場所を得た。李東陽が「仙踪恍惚として論ずるに足らず」と詠ったのは、黄鶴楼に遊んだ多くの文人たちの感慨であったらう。

そして長江の上流、万里橋においても唐代には費禕の伝承が形成され、宋代にかけて定着したかに思えたが、南宋時に張温説が派生し、明代に至って再び費禕の逸話として定着した。

北宋から南宋にかけて、作詩人口の増加により詩跡が多様化し、様々な伝承が派生したのは、ある意味自然な成り行きであった。それは、黄鶴楼と万里橋で費禕が直面した事情とも符合する。登仙しきれなかった仙人費禕の伝承は、詩跡の多様化と三国志の物語の展開という二つの大きなうねりのなかでたゆたっていたといえるだろう。

## 注

- (1) 吳黃武二年、城江夏以安屯戍地也。城西臨大江、西南角因磯爲樓、名黃鶴樓。(『元和郡県図志』中華書局、二〇〇四年)
- (2) 『西陽雜俎』卷二「語資」に、「鸚鵡賦」の作者には禰衡と潘尼の二説があると見えるが、後世多くの詩人が禰衡を詠っており、清・胡鳳丹『鸚鵡洲小志』に歴代の詩文が数多く採録されている。三国時代の人物を詠んだ詩については、角谷聰『三国時代物語』の形成——『全唐詩』における三国時代の人物——(『中国学研究論集』第五号、二〇〇〇年)等参照。
- (3) 夏口城據黃鶴磯、世傳仙人子安乘黃鶴過此上也。(『南齊書』中華書局、一九九七年)
- (4) 費禕を費禕と記す書も多いが、本稿では費禕に統一する。また閻伯瑾に關しても、閻伯瑾・閻伯珪等様々に記されているが、本稿では閻伯瑾に統一する。但し、いづれも引用箇所に関しては原典の表記に拠る。
- (5) 吉田隆英「仙人子安のこと」(『日本中國學會報』第三十三集、一九八一年)、莊司格一「中国中世の説話——古小説の世界——」(白帝社、一九九二年)、馮天瑜・主編『黃鶴樓志』(武漢大学出版社、一九九九年)等参照。
- (6) 費禕と孫權・諸葛恪との交流については、『太平広記』卷二四五「費禕」(出啓顔録)、卷二五三「諸葛恪」(出啓顔録)にも見える。
- (7) 州城西南隅有黃鶴樓者、圖經云、費禕登仙、嘗駕黃鶴返憩於此、遂以名樓。(『全唐文』卷四四〇、中華書局、一九八七年)
- (8) 『全唐詩』卷六六〇、中華書局、一九六〇年。
- (9) 『全唐文』卷八九四、中華書局、一九八七年。
- (10) 『唐才子伝』卷九「羅隱」に「廣明中、遇亂歸鄉里、時錢尚父鎮東南、節鉞崇重、隱欲依焉、進謁投素作、卷首過夏口云……一箇禰衡谷不得、思量黃祖護英雄」鏐得之大喜遇、以書辟曰……「仲宣遠託劉荊州、蓋因亂世；夫子樂爲魯司寇、祇爲故鄉。」隱曰……「是不可去矣！」遂爲掌書記。」と見える。(『唐才子伝校箋』中華書局、一九九〇年)なお、羅隱と錢鏐の關係については、池澤滋子『呉越錢氏文人群体研究』(上海人民出版社、二〇〇六年)等参照。
- (11) 『四庫全書』。

- (12) 『全宋詩』 卷一一〇五、北京大學出版社、一九九五年。
- (13) 予按蜀志、費禕爲魏降人郭循所害、則禕固不得其終、安有駕鶴而想此者也。〔苕溪漁隱叢話後集〕中華書局、一九七六年)
- (14) 崔顥題黃鶴樓詩、亦以爲費禕昇仙之地、承襲謬誤、不復攷正。(注(13) 前掲書)
- (15) 蓋黃鶴名樓、以山得名也。(略) 而《唐圖經》何自而爲怪說、謂費文偉仙去、駕鶴來想於此、云々。〔全宋文〕卷五七三八、上海辭書出版社・安徽教育出版社、二〇〇六年)
- (16) 此皆因黃鶴之名、而世之喜事者妄爲之說、後來者既不之察、亦從而並緣增飾之。(注(15) 前掲書)
- (17) 松尾幸忠「南宋の地方志に見られる詩跡の觀點について」〔中國文學研究〕第三十二期、二〇〇六年) は、南宋期の地理書から詩跡の觀點が明確に認められるものが増えてくる、と指摘する。
- (18) 閻伯珪作記、以費禕事爲信、王得臣、張枋辨之。〔輿地紀勝〕中華書局、二〇〇五年)
- (19) 在子城西南隅、黃鶴山上、此樓因山得名、蓋自南朝已著矣、云々。〔方輿勝覽〕中華書局、二〇〇三年)
- (20) 黃鶴樓、舊傳費禕飛升於此、後忽架黃鶴來歸、故以名樓、號爲天下絕景。(略) 今鄂人謂之呂公洞、蓋流俗附會也。〔四部備要〕第七九冊「渭南文集」卷四十七、中華書局、一九八九年)
- (21) 『全宋詩』 卷三三三七、北京大學出版社、一九九八年。原文では「費禕」に作るが、「四庫全書」所収『御選宋詩』卷五六によつて「費禕」に改めた。なお『御選宋詩』は「不醉倚樓呼費禕」に作るが、「不醉」は「大醉」の誤りか。
- (22) 莊司格一、注(5) 前掲書所収「黃鶴樓」は、『湖北通志』注引『鈍齋文選』より「明より以來、費禕に代つて呂岳となり、肖像を祠るようになって有名になつた」との記述を引いている。また「まず宋代には費禕とされ、ついで八仙の成立によつておそらくは元以降〔陔余叢考〕の考証による）、あるいは明代に、費禕に代つて呂洞賓となされたのであらう」とする。元代で費禕に言及した資料としては、楊齊賢集注・蕭士贇補注『分類補注李太白集』があり、卷七「江上吟」注、並びに卷一九「訓岑助見尋就元丹丘對酒相待以詩見招」注は『函經』系統の費禕の記述を引いている。なお『大元混一方輿勝覽』卷下は、『南齊志』のみを記し、費禕については触れていない。
- (23) 黃雀故事、或曰王子安、或曰費禕。今人乃盡歸之呂仙。(略) 亦鶴山下有費禕洞、則跨雀客爲費禕無疑。〔明刻黃鶴樓集〕湖北人民出版社、一九八四年) 以下、『明刻黃鶴樓集』よりの引用は、王啓輿他・校注『明刻黃鶴樓集校注』湖北人民出版社、一九九二年も参照した。
- (24) 漢神仙費文禕流乘而空不復返、具見于唐詩人崔顥所題、諒非誣者。後呂仙洞窟亦屢過是、吹鐵笛于月夜中、聲與天籟相鏗異、時爲之構亭樓左、迄今談仙家者競傳爲故事。〔明刻黃鶴樓集〕湖北人民出版社、一九八四年)
- (25) 『明文海』 卷三六二、中華書局、一九八七年。



- (26) 注(23) 前掲書。
- (27) 注(23) 前掲書。
- (28) 注(23) 前掲書。
- (29) 注(23) 前掲書。
- (30) 莊司格一、注(5) 前掲書所収「黃鶴樓」参照。また佐藤義寛「列仙全伝」研究(四)——伝記資料所在索引——(『文藝論叢』第六四号、二〇〇四年)によると、『列仙全伝』に見られる費禕の説話は、『広列仙伝』『仙苑編珠』『三洞珠囊』『三洞群仙録』『歴世真仙体道通鑑』『太平広記』等の書書には引かれておらず、完全に孤立しているようである。
- (31) 費禕洞在黃鶴山後、舊經云、費文禕昇仙處、李宗孟詩、空遺費仙跡、不見庾公遊、草木有新色、江山餘故愁。(『大明一統志』三秦出版社、一九九〇年)
- (32) 費禕洞在黃鶴山陽、世傳費文偉修仙處。因荀環字叔禕、而誤文偉、云々。(『江夏県志(一)』成文出版社、中国方志叢書、一九七五年)
- (33) 俗名蛇山。山陰有費禕洞、任昉曰…荀環字叔禕、昇仙于此、非費文禕也。(『説史方輿紀要』中華書局、二〇〇五年)
- (34) 『御製詩集初集』卷三〇(『四庫全書』)。
- (35) 費公祠記碑、乾隆三十二年、湖北按察使大興朱珪撰、在黃鶴樓仙棗亭。(『江夏県志(三)』成文出版社、中国方志叢書、一九七五年)
- (36) 馮天瑜・主編『黃鶴樓志』武漢大学出版社、一九九九年。なお楹聯に関しては、張誠傑・選編『黃鶴樓詩詞文聯選集』華中工学院出版社、一九八四年も参照した。
- (37) 注(36) 前掲書。
- (38) 注(36) 前掲書。
- (39) 注(36) 前掲書。
- (40) 高橋繁樹「劉玄德醉走黃鶴樓」の考察——三国平話と三国雜劇(4)——(佐賀大学教養部「研究紀要」第八卷、一九七六年)参照。黃鶴樓と甘露寺の関係については、ほかに石麟「從《黃鶴樓》到《甘露寺》——片談戯曲小説作品中劉備与東呉的恩怨怨——」(『全国中文核心期刊 芸術百家』二〇〇四年第五期、総第七九期)等がある。また甘露寺における三国志の物語の形成については、角谷聰「三国志物語」における赤壁の戦いと甘露寺説話(『中國中世文學研究』第四十五・四十六合併号、小尾郊一博士追悼特集、二〇〇四年)、拙稿「甘露寺縁起考」(『藝文研究』第八十八号、二〇〇五年)参照。
- (41) 湧月臺在黃鶴樓、旁有石刻、湧月二字相傳漢曹孟德遺筆。(『湖廣通志』卷七七、(『四庫全書』)。また『広陽雜記』卷四に「俗以為曹孟德所書。夫曹公未嘗至此、其說可笑」とあると、注(36) 前掲『黃鶴樓志』一〇四頁に見える。
- (42) 任乃強・校注『華陽国志校補函注』(上海古籍出版社、一九八七年)。

- (43) 萬里橋、架大江水、在縣南八里。蜀使費禕聘吳、諸葛亮祖之、禕嘆曰、萬里之路、始於此橋。因以爲名。(『元和郡縣圖志』中華書局、二〇〇四年)
- (44) 萬里橋在州南二里。亦名篤泉橋、橋之南有篤泉也。漢使費禕聘吳、諸葛亮祖之、禕歎曰、萬里之路始於此橋。故曰萬里橋。(『四庫全書』)
- (45) 七星橋之一曰長星橋者、古今相傳孔明於此送吳使張溫曰…「此水下至揚州萬里。」後因以名。或則曰、費禕聘吳、孔明送之至此、曰…「萬里之道、從此始也」。(『全蜀藝文志』線裝書局、二〇〇三年)
- (46) 『三國志』卷五七「吳書・張溫傳」參照。
- (47) 二說雖殊、要之因孔明得名。(『四庫全書』)
- (48) 明清以降、『華陽國志』を典故として費禕と諸葛亮の逸話を伝える書が多い。『天中記』卷一六をはじめ、清代には『淵鑑類函』卷三〇〇、三五二、『御選唐詩』卷二〇、仇兆鰲『杜詩詳注』卷九等、いずれも『華陽國志』から費禕の逸話を引いている。しかし管見の限りでは、『天中記』以前には『華陽國志』からとして費禕の逸話を引いている例は見当たらない。任乃強「成都七橋考」(注(42)前掲書所収)も、万里橋を費禕と結びつけた最古の例として『元和郡縣圖志』をあげている。この点に関して『華陽國志』の版本の問題とも併せて、待考。なお任乃強「成都七橋考」は「萬亦爲姓氏字、亦可疑」「萬里」是里名。」とも指摘している。
- (49) 「寄題黃鶴樓簡秦開府」に、「仙蹤恍惚不足論」と見える(注(23)前掲書)。